

曾木の滝周辺における着地型観光地 形成手法の適用に関する研究

永村 景子¹・星野 裕司²・小林 一郎²・中川 雄大³

¹学生員 熊本大学大学院 自然科学研究科 (〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1)
E-mail: 108d9403@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学大学院 自然科学研究科 (〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1)

³正会員 株式会社 建設技術研究所 東京本社 ダム部 (〒103-8430 東京都中央区日本橋3-21-1)

曾木の滝は鹿児島県伊佐市の代表的な観光地である。付近では分水路が完成、新橋や小水力発電所は間もなく完成する。また曾木発電所遺構や江戸時代の舟運跡など、周辺には大小の地域資源が存在している。しかし訪問客の多くは、曾木の滝のみを対象に通過型の観光を行う。そこで本研究は、着地型観光の概念を曾木の滝周辺に適用し、これら観光客の滞在時間を延ばすこと、さらに体験型・交流型観光地への転換を試みることを目的とする。本稿ではまず、地域で行われていた行政による取り組み、住民による地域資源のリストアップ、既に発信されている観光商品などを整理し、地域資源を抽出する。また地域資源分類と照らし合わせ、不足している資源を指摘する。その結果、資源の数は充足しているが、「人財」の育成や支援が課題であることが明らかとなった。

Key Words : *Sogi Falls, community tourism, regional resources, sightseeing spots, human resources*

1. はじめに

九州新幹線鹿児島ルートの中線開業を契機として、沿線の地域では新幹線を利用する観光客の呼び込みに力を注いでいる。鹿児島県伊佐市(図-1)は、こうした背景を地域振興に繋げようと、行政自ら観光客誘致の方策を打ち出している自治体の一つである¹⁾。2008(平成20)年、旧大口市及び旧菱刈町が合併し誕生した伊佐市では、少子高齢化・低雇用率の進行が著しく、社会福祉対策や定住促進など多くの地方が抱える問題に直面している。そのため観光は、地域振興の切り札として、行政の寄せる期待が大きい。

伊佐市の代表的な観光地である曾木の滝は「東洋のナイアガラ」と称され、2009(平成21)年には「平成百景」にも選ばれた(写真-1)。来場客数は2000(平成12)年には年間50万人であったが²⁾、現在では30万人に減少している³⁾。観光客の大半は、桜や紅葉の見頃、或いは、もみじ祭り開催時期の利用客であり、それ以外は食事やトイレの休憩のために立ち寄り、滝を見て帰るといった通過型の観光が行われている。

曾木の滝周辺では、マス・ツーリズム時代より観光開発が行われてきた。近年では2011(平成23)年3月に河川激甚災害対策特別緊急事業の一環として曾木の滝分水路が完成、同年11月には曾木の滝下流に(仮)新曾

木大橋の開通を控え、さらに第一曾木発電所の取水口を利用した小水力発電所は、2012(平成24)年10月の稼働を目指して整備中である。また、下流の鶴田ダム建設のため1965(昭和40)年に廃止された第二曾木発電所遺構の保存修理工事(平成16~20年度)や、宮人川ビ



図-1 伊佐市及び曾木の滝 位置図



写真-1 曾木の滝

オート整備（平成22年度）も相次いで実施された。

本研究は、通過型観光地である曾木の滝周辺において、滞在時間の延伸、さらには交流・体験型の観光地へと転換を図ることを目的とする。観光地に内在する地域資源を足元から見直し、観光商品へと磨いていく着地型観光の取り組みは、曾木の滝周辺の観光を考えるにあたり、有効な視座となりえる。そこで、曾木の滝周辺において、着地型観光地の形成手法を適用することにより、周辺の他の資源と連携を図ることにより、曾木の滝周辺に点在する地域資源のネットワーク化を試みる。

2. 研究方法

本章では着地型観光や地域資源の定義を示し、本研究の流れを述べる。

(1) 着地型観光の定義⁹⁾

尾家は着地型観光の定義を、「住民が主体となって観光資源を発掘、プログラム化し、旅行商品としてマーケットへの発信・集客を行う観光事業への一連の取り組みのこと」としている。現地集合・現地解散という旅行パターンをとることから着地型との表現が用いられる。従来旅行会社が行ってきたようなビジネスは、発地型観光と呼び区別している。

(2) 地域資源の定義

地域資源の捉え方、分類方法は諸説ある。内田は、観光が経済活動である側面に着目し、地域資源を地域ブランド化するプロセスを概念的に示している⁹⁾。それによれば地域資源には、景観、自然環境、歴史的背景、文化・風土といったイメージの原型を超えて、地域イメージを形作るパワーがある。地域資源の価値が地域内の関係者により共有され、地域外に発信され、定着することにより地域ブランドが構築される、としている。一方で、地域ブランド化にあたっては、①地域全体の魅力を高めて「地域ブランド」を目指す、②個々の地域資源の魅力を高めて「地域ブランド」を目指す、という2つの目標が整理されず混同したまま、議論がなされるケースが多い、と指摘する。

こうした混乱を解消するには、地域資源の捉え方や磨き方が重要である。尾家は、地域活性化や地域再生の視点から、表-1のように地域資源を分類している⁹⁾。着地らしさを演出するには、資源の「産業」「環境」「都市」と、「ひと」「もの」「こと」の結合・組合せが重要な視点とされる。また、具体的な観光資源づくりにあたり、観光客の立場ともてなす着地側の立場を重視し、地域資源を観光対象や、地域活動や地域再生に繋がる環境条件と関係づけて整理し（表-2）、地域資源を絞る必要性も述べている。

表-1 地域資源の分類

資源	資源の内容	観光対象
人材	人、出会い、交流、体験、創作、知財	ひと
歴史・文化	伝統文化、行祭事、イベント、生活文化、史跡、社寺	もの
産業	既存産業、企業、技術、生産物、特産品	産業
自然・環境	自然、景観、都市空間、農林空間、水、動植物	環境
活動	アミューズメント、飲食、ショッピング、遊び、スポーツ、ボランティア	こと
都市機能	都市施設、文化施設、レジャー施設、知的施設	都市

表-2 地域資源の構成表

観光対象	着目する地域資源の内容	環境条件	着地域域の条件
ひと	地域の文化を語る人	自然(空間)	美しい景観
もの	祭事と生活文化の関係を知る	生業	伝統的な技法で仕事を継続
こと	学び、交流・創造する活動	基盤(機能)	発表・交流・展示会議の施設

(3) 着地型観光地の形成手法と本稿の構成

尾家は、地域資源を活かした観光商品づくりの手法を、以下の4つのステップで示している⁷⁾。

I. 地域資源探し：観光客の立場を考え、目的意識と目標を持ち、着地の人々がリストアップする。着地を足元から見直す機会となる。

II. 観光商品に磨きあげる：リストアップされた資源の中で、地域特性としての発信性や、観光客・着地の人々の共通認識や共感の可能性を有する資源について、歴史的由来や地域の生活・活動との関わりを調査する。

III. 地域で共有できる宝化：磨きあげの結果、地域で共有でき、誇れる財宝として位置づける。着地の人々が、自信と確信をもって地域外へ紹介、観光客を吸引する磁石として機能することが見込まれる。

IV. 社会実験を通じた呼び込み：地域の宝化した資源を観光商品として地域外の市場に発信し、観光客を着地に呼び込むには、試行錯誤を繰り返し、ノウハウや技術を身につける課程が必要である。

こうして着地らしい観光商品づくりの課程が完成し、獲得した自信や確信は、次の段階への波及が期待できる。

本稿では上記の着地型観光地の形成手法を曾木の滝周辺に適用し、ネットワーク化を図るべき地域資源の抽出（上記のステップI～II）を試みる。ただし着地である伊佐市では既に、官民による様々な形でステップI～IIIに該当する取り組みが行われているものの、観光商品づくりとして成功しているとは言い難い。このような状況を鑑み、まず3章では、過去20年間、曾木の滝周辺において行政が行ってきた取り組みを分析するとともに、行政が捉える地域資源の特徴や捉え方の課題を述べる。続いて4章では、住民の捉える地域資源を分類するとともに、分布状況を把握する。さらに5章では、行政や住民が捉える資源に、プロモーション媒体が発信する観光資源を加えて、地域資源の絞り込みを行うとともに、不足している資源を指摘する。こうして絞り込んだ曾木の滝周辺の資源について、着地型観光の視点から今後必要となる方策を指摘する。

3. 行政による曾木の滝周辺の取り組み

過去 20 年間、曾木の滝周辺では、国（旧建設省九州地方建設局、国土交通省九州地方整備局（川内川河川事務所、鶴田ダム管理所）・県（鹿児島県）・市（旧大口市、伊佐市）等により、様々な計画や事業がなされている。表-3 はこれらの取り組みを「構想」「方針」「計画」「事業」の4段階に分類し、年表にまとめたものである。表中において「構想」「方針」「計画」の内容に応じ、ハード整備重視のものは赤字、ソフト整備重視のものは青字で示した。なお、当該地域に限らず、構想や方針、計画、ビジョンなど様々なタイトルの報告書が刊行されているが、その内容や計画の精度について、具体的な定義や統一見解は見当たらない。そこで今回は、独自に定めた以下の指標で各報告書の内容を照査し、これを分類する。

構想：地域づくりの大枠を定めたもの。現状の課題を整理した上で将来の目標、全体像を定め、ゾーニングなどを示したもの。

方針：地域づくりのために、個別ゾーンの方向性を定めたもの。

計画：地域作りのための事業実施に向けた条件設定。実施期間や実施の方法（施設整備やサイン計画といったハード整備、イベント開催や仕組み・運営体制づくりといったソフト整備）を定めたもの。

事業：上記の計画にそった実際のハード整備。

（1）時系列による取り組みの概観

取り組みを時系列で概観すると、以前はハード整備寄りであった取り組みが、次第にソフトに重点を置いたものに替わっていることがわかる。

2000（平成 12）年頃までは地域づくりの将来像となる「構想」「方針」が、主体を問わずハード中心に語られている。この期間において特異なのは、1998（平成 10）年、県により策定された『鹿児島県景観形成基本計画』⁸⁾である。当計画は、他の計画と異なり、既存の景観や資源を守り育てていく方針を謳っている。しかしその後も旧大口市では、『大口市都市計画マスタープラン』⁹⁾や『大口市第 4 次総合振興計画』¹⁰⁾といった市の地域づくりは、依然ハード整備を目標に据える。

地域づくりの方向性がソフト寄りに転換するのは、2001（平成 13）年から取り組みが開始された『奥薩摩・水と緑の郷づくり構想』¹¹⁾以後である。国交省鶴田ダム管理所を中心として策定された『鶴田ダム水源地域ビジョン』¹²⁾、2008（平成 20）年合併前の伊佐市域の自治体により策定された『新市まちづくり計画』¹³⁾、鹿児島県により策定された『かごしま将来ビジョン』¹⁴⁾及び『鹿児島県観光振興基本方針』¹⁵⁾は、いずれもソフト施策を重視した「構想」及び「方針」となっている。

（2）取り組みの相互関係

旧建設省九州地方建設局による『川内川水系河川空間管理計画』¹⁶⁾（1990（平成 2）年）や鹿児島県による『ふるさとプロムナード計画』¹⁷⁾（1992（平成 4）年）を受け、旧大口市では 1994（平成 6）年に『曾木の滝周辺整備事業基本計画』¹⁸⁾を策定している。これは曾木の滝周辺をリバーリゾートとして大々的に開発する「構想」であったが、計画のほとんどは実施を見ることなく、2002（平成 14）年、対象範囲が大幅に縮小される。

また 1993（平成 5）年、奥薩摩の 1 市 3 町（旧大口市、旧薩摩町、旧鶴田町、旧宮之城町）は広域的な観光浮揚と地域活性化を図るため、「県道鶴田大口線整備促進期成会」を設立し、主にハード面からの環境整備に取り組んだ。これは 1995（平成 7）年からの県道鶴田大口線改良、（仮）新曾木大橋整備へと順調に実を結ぶ。一方で、こうした取り組み中に曾木発電所遺構が脚光を浴びたことから、域内には他にも観光名所となる地域資源が内在している、として新たな取り組みも派生する¹⁹⁾。上記期成会を中心として設立された「奥薩摩・水と緑の郷づくり推進協議会」は、2001（平成 13）年からソフト施策に力点を置く『奥薩摩・水と緑の郷づくり構想』を進める。同年には鹿児島県政の基本となる『21 世紀新かごしま総合計画』が策定され、計画実現の目標年度を 2010（平成 22）年度と定める²⁰⁾。当計画において、『奥薩摩・水と緑の郷づくり構想』は主要プロジェクトと位置づけられる。一方、鹿児島県では、概ね 10 年に 1 度、県政の基本的な方向性を示す県政計画を策定している。

『21 世紀新かごしま総合計画』の計画期間の完了に合わせて『かごしま将来ビジョン』（2008（平成 20）年）を策定、さらに同地域編を 2010（平成 22）年に策定している。また当ビジョンを踏まえて同年、『鹿児島県観光振興基本方針』が策定されている。しかしこれらはいずれも、取り組み項目毎に、細かな方向性が示されているものの、『21 世紀新かごしま総合計画』のように主要プロジェクトや実際の事業への言及はない。

さらに興味深いのは、曾木の滝周辺のハード事業の実施主体は、曾木発電所遺構保存修理工事は国、（仮）新曾木大橋建設は県、小水力発電所は実質的には民間企業であるのに対し、各事業の「構想」・「方針」・「計画」はいずれも市が取り組んでいる点である。こうした状況から、取り組みを「構想」から「事業」へと進展させるには、市の「計画」立案が重要な役割を担うが、『奥薩摩・水と緑の郷づくり構想』の種々のソフト施策を実現に至らしめる「計画」は未だ策定されていない。一方、当構想に示された体験メニューの一部は NPO（あつたらし会）により、ヘリテージ・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、下ノ木場集落の歴史学習、大鶴湖遊覧船として事業化されている²¹⁾。

表-3 行政の取り組み年表
(表中の矢印は取り組みの進展を表す)

策定年月			取り組み段階				取り組み主体	魅力とされる資源
西暦	和暦	月	構想	方針	計画	事業		
1990	平成2			川内川水系河川空間管理計画			(旧)建設省九州地方建設局	川内川 / 鶴田ダム/田園風景 / 曾木の滝 / チスジノリ(国指定天然記念物) / 大鶴湖 // 広域総合運動公園 / 羽月川 / 針持川 / ウスギモクセイ
1992	平成4		ふるさとプロムナード計画				鹿児島県	曾木の滝公園 / 瀧公園
1993	平成5	5月				県道鶴田大口船整備促進期成会設立	大口市・薩摩町・鶴田町・宮之城町	-
1994	平成6		曾木の滝周辺整備事業基本計画(更新前)				大口市	大鶴湖 / 曾木の滝 / 動・植物(特に野鳥) / 曾木の滝の桜、つつじ、紅葉 / (仮)新曾木大橋
1995~	平成7~					一般県道鶴田大口線改良計画	鹿児島県	-
1998	平成10		大口市地域新エネルギービジョン策定				大口市	-
				鹿児島県景観形成基本計画			鹿児島県	川内川 / 大鶴湖 / 曾木の滝 / 川内川流域県立自然公園 / 大口盆地の水田 / 国道(267,268,447号) / 天然林や「伊佐ヒノキ」人工林の山並み
2000	平成12	2月		大口市都市計画マスタープラン		大口市第4次総合振興計画	大口市	自然 / 曾木の滝公園 / 大口総合運動公園
		3月					大口市	大鶴湖 / 曾木の滝 / 曾木の滝公園 / 動植物 / 森 / 曾木発電所遺構
		5月	曾木発電所保存活用基本構想				大口市	曾木発電所遺構
		12月				曾木発電所保存・活用基礎調査報告書	大口市	曾木発電所遺構
			大口市省エネルギービジョン策定				大口市	小水力発電所
2001	平成13		奥薩摩・水と緑の郷づくり構想(構想の取りまとめは2002年)				奥薩摩・水と緑の郷づくり推進協議会(国・県・市町) / 推進事務局は伊佐市	淡水魚 / ホタル / ずいどう / もみじ祭り / (小水力発電施設) / 小動物 / 陶芸 / (多目的広場) / カヌー / Eポート / (大鶴湖) / 曾木の滝つぼ / (多目的広場) / 眺望(新しい眺望スポット) / 野鳥 / 農家(農業) / 養蚕 / 温泉 / 歴史的遺産 / 産業遺産(遺構) / 森の展望所 / (自然への環境負荷が少ない自然エネルギー発電施設) / 下 / 木場集落 / 川ざらえ(舟運跡) / 曾木発電所遺構
						21世紀 新かごしま総合計画	鹿児島県	曾木の滝周辺 / 大鶴湖
		3月				おおくちの資源絵地図帳	大口市	(3.2節にて詳述)
2002	平成14	3月				曾木発電所保存修復報告書	大口市	曾木発電所遺構
		3月		鹿児島県観光戦略21			鹿児島県	曾木の滝 / 川内川 / 曾木発電所遺構
			曾木の滝周辺整備事業基本計画(更新後)				大口市	曾木発電所水路
			鶴田ダム水源地域ビジョン				鶴田ダム水源地域ビジョン協議会(鶴田ダム管理所)	川内川 / 大鶴湖 / 曾木発電所遺構 / 自然環境 / 原風景 / 文化 / 人
2004	平成16	1月	曾木の滝地点ハイドロパレー計画				大口市	小水力発電所
2004-2007	平成16~19					曾木発電所遺構保存修理工事	国土交通省 鶴田ダム管理所	曾木発電所遺構
2004-2011	平成16~23					県道鶴田大口線(仮)新曾木大橋整備事業	鹿児島県	(仮)新曾木大橋
2006-2011	平成18~23					曾木の滝分水路整備事業	国土交通省 川内川河川整備事務所	曾木分水路
2007	平成19			川内川水系河川整備基本方針			国土交通省 川内川河川整備事務所	川内川 / 大口盆地の田園地帯 / 大小の滝 / 曾木の滝 / 瀬・淵・ワンド / 水際草地 / オイカワ / チスジノリ / カワゴケソウ / カワゴケミズメイガ / 砂礫河原 / 崖地 / 河畔林(アラカシ、メダケ) / カワセミ / タヌキ / ニゴイ / カワニナ / ゲンジボタル /
2008	平成20			新市まちづくり計画			伊佐地区合併協議会	自然資源 / 農業 / 曾木の滝(景勝地) / 歴史資源 / 食 / 地域文化 / 温泉
		3月		かごしま将来ビジョン			鹿児島県	カルデラ / 自然環境 / 食 / 文化・芸術・体育施設 / 景観
2009	平成21					川内川水系河川整備計画	国土交通省 川内川河川整備事務所	チスジノリ / カワゴケソウ
2010	平成22	3月		鹿児島県観光振興基本方針			鹿児島県	豊かな資源 / イベント開催
		3月				宮人川ピオトープ	国土交通省 鶴田ダム管理所	宮人川ピオトープ
						曾木の滝における省力発電計画	伊佐市 / 日本工営	小水力発電所
2011	平成23			第1次伊佐市総合振興計画			伊佐市	曾木の滝公園

(3) 取り組みで魅力とされる資源

2002(平成14)年頃までは、曾木発電所遺構及び小水力発電を対象としたものを除き、いずれの取り組みにおいても曾木の滝と大鶴湖が資源として扱われている。また轟公園や運動公園などの施設のほか、川内川も資源として多く取り上げられている。一方で『奥薩摩・水と緑の郷づくり構想』(2001(平成13)年～)や『おおくちの資源絵地図帳』(2002(平成14)年)では、これまで資源として挙げられなかった対象も細かく資源として捉えられる。これ以後、自然環境や生物、地形など多様な資源が挙げられている。また、旧大口市の「構想」からハード整備を実施した曾木発電所遺構や小水力発電所、(仮)新曾木大橋は県や市の「構想」や「計画」において資源とされているものの、国により計画・事業化された宮人川ビオトープは県や市に資源として捉えられていない。また曾木の滝分水路は、1994(平成6)年の『曾木の滝周辺整備事業基本計画』では「水に親しみ緑に抱かれたサブリーバゾーン」として資源に位置づけられていたが²²⁾、2002(平成14)年の更新時に計画対象から除かれた²³⁾。現在では国以外のいずれの取り組みにおいても、分水路は地域資源として位置づけられていない。

このように、行政の取り組みは、ハード整備重視から、次第にソフト寄りの「構想」、「方針」が策定されつつある。しかしソフト整備は「計画」以降の段階に進んでいない。また事業の「計画」主体次第では、整備済みの施設であっても、資源と捉えられないなど、行政による取り組みや資源の捉え方には偏りがある。

4. 住民が捉える地域資源

旧大口市では、2000(平成12)年に400名を越える地域住民が参加し『おおくち資源絵地図帳』²⁴⁾(以下、絵地図帳とする)を作成した。絵地図帳は、地域づくりの基礎資料とするため、小学校区毎に情報が整理され、資源の情報リストとそれらの資源分布場所を示すイメージマップで構成されている。以

下では、曾木の滝周辺エリアである羽月、羽月西、針持、曾木の4小学校区の絵地図帳に記載された資源を住民が捉える地域資源とし、それらの資源分類及び分布状況の整理を行う。ただし説明文の表示が絵地図上になく、位置関係の把握ができない地域資源、記述があいまいな地域資源、事実のみで形が残っていない地域資源については除外した。

(1) 資源分類

絵地図帳の資源を、2章に示した「人財」「歴史・文化」「産業」「自然・環境」「活動」「都市機能」という6つの資源に分類を行った(表-4)。

(2) 資源の分布

国土地理院発行の2万5千分の1地形図をもとにベース図を作成し、資源分類に沿ってプロットを行った(図-2)。住民の捉える資源には大きく4つの特徴的な分布が見られる。

① 神様にまつわる資源の分布

「歴史・文化」の多くは「田の神さあ」や「水神さあ」等の神様を祭った地蔵や石碑であり、その中でも「田の神さあ」の数が多し。加えて、「自然・環境」においても田園風景を地域資源として捉えていることから、伊佐において稲作文化は地域の宝であることが窺える。

② 戦国武将にまつわる資源の分布

豊臣秀吉や島津家、島津に仕えた新納忠元にまつわる神社や城跡、「秀吉の道」と呼ばれるハイキングコース等が点在している。分布個所としては、羽月小学校区や曾木小学校区等、東側に多く分布している。これは、天正15(1587)年に秀吉が九州攻めの帰路として天堂ヶ尾一鈴ノ瀬一園田宇都というルートをとったという説があり、この各所において逸話の残る地域資源が点在していることによる。

③ 遺構にまつわる資源の分布

それぞれの小学校区において、江戸後期から昭和初期までの遺構や、石橋、堰等が点在している。種類は様々だが、JR宮之城線の廃線跡や発電所の遺

表-4 抽出された資源

資源	羽月小学校区	羽月西小学校区	針持小学校区	曾木小学校区
人財	竹細工の名人/むしろ作りの名人	黒豚つくりの名人	わら草履づくり名人	花つくりの名人
歴史・文化	【戦国武将にまつわる資源】 羽月城址/首塚瀬戸/古戦場跡/熊野神社/松原神社/若宮八幡神社/平松神社/新宮神社/強兵衛の河童石・カ石/観音瀧/清水神社/白木神社 【川ざらえにまつわる資源】 良眼原の碑/船着場跡・米倉跡/稻荷神社 【遺構】 1861年の石橋/羽月駅跡/慶園の校舎/羽月滑空訓練所跡/旧下ノ場集落/旧曾木発電所水路/曾木発電所遺構 【神様】 田の神さあ(2)/水神さあ(3)/恵比寿様 【伝統・文化】 三尺棒踊り/海音寺潮五郎歌碑(文化人の記念碑)/白木太鼓踊り/白木棒踊り	【戦国武将にまつわる資源】 大平城跡 【神様】 田の神さあ(8)/水神さあ(6)/馬頭観音さあ(5)/山の神さあ(2)/えびすさあ/秋葉さあ/おねつの神様 【大正・昭和初期の橋・堰・水車跡】 太鼓橋/山たざ橋/大王橋/寺下イゼキ/水車イゼキ/下井手イゼキ/水車小屋跡	【戦国武将にまつわる資源】 秀吉の道 【開田の歴史にまつわる資源】 西太良開拓地 樺越トンネル跡・水路跡/針持駅跡・引込み線跡/茶屋の跡/浜崎商店跡/旧針持小学校跡/直角石橋 【神様】 田の神さあ(5)/馬頭観音さあ(4)/水神さあ(3)/山ん神さあ/ナマツの神さあ 【伝統・文化】 浅山示源流棒踊り/田原自願流棒術	【戦国武将にまつわる資源】 天堂ヶ尾開田碑/平松神社/秀吉の道/愛宕神社/曾木城跡 【川ざらえにまつわる資源】 福崎乗之助墓 【遺構】 曾木小・西田良中学校跡/西太良駅跡/西田良村役場跡/養蚕掃きたて農場跡 【神様】 田の神さあ(5)/水神さあ(2)/ナマツの神さあ/馬頭観音さあ(3) 【伝統・文化】 浅山流川西棒踊り/針牟田の棒踊り
産業	ジャパンファーム/スカラハイタッチ/日本フードパッカー/稚アユ	沖田黒豚牧場		有機農業団地
自然・環境	鳥神山/田園風景(伊佐平野・むしろ)/川内川/羽月(4)/曾木の滝/厳文寺の滝/湧水池/小滝/カワコケウ/ぼたるの里/ハナショウブ	やぼん滝/下村滝/霧降の滝/中の滝/神秘の泉/池(4)/水源地/チャンチンモドキ/イチイガシ/大イチョウ/ハナショウブ/ホタルの生息地(2)黒豚生息地	ホタルの里/モウセンゴケ自生地/立田の瀧/棚田	ワラズゴ/水鳥/七面鳥/ポニー/広葉樹林帯
活動	大島南公民会の朝市/曾木の滝温泉/湯ノ谷の湯/轟公園/曾木の滝公園/天然のウォーターズライダー/羽月公園	水びっしや(水遊び)場(2)/老孝庵	しいたけ講	多目的広場/魚釣り場
都市機能	公民館(2)/小学校/幼稚園/病院/文化会館	公民館(9)/小学校(1)/大口リサイクルプラザ(1)	公民館(2)/小学校/郵便局	西田良コミュニティセンター/多目的広場トイレ

構、学校や工場の跡地等、繁栄と衰退を歩んできた人々の歴史が窺える。

④コミュニティの分布

神社は昔から交流の場として活用されることが一般的に知られている。対象地においても神社と隣接して公民館やゲートボール場等のコミュニティの場が形成されている箇所が多く見受けられる。また地域資源は、こうした公民館やゲートボール場等の周辺に群をなしている箇所が多く、コミュニティの場に近いほど地域住民が認識している身近な資源が多いことがわかる。地域資源は民家の敷地内や木陰に隠れている箇所もあるため、地域住民に尋ねなければ発見しにくいものも多い。今後、地域住民が捉えている資源を旅行者へ伝えていくためには、こうしたコミュニティを小さな交流の拠点とすることが有効と考えられる。

5. プロモーションの現状と地域資源の抽出

これまで見たように、行政が捉える資源は、自らの展開してきた取り組みや、事業に大きく左右されている。一方で住民は、地域の伝承や歴史、生活の基盤となるコミュニティなどに分類される資源に着目している。以下では、旅行者に対する観光情報の発信状況を分析するとともに、行政・住民・プロモーション媒体の各々が捉える資源の重複状況をもとに、着地型観光に活かし得る地域資源の抽出を行う。

(1) プロモーションの現状

プロモーションの媒体としては、一般的にテレビ、ラジオ、新聞、雑誌、屋外広告、ダイレクトメール、ウェブサイト、パンフレットが用いられる。ここでは、旅行者がいつでも閲覧しやすい情報媒体として行政や公的機関が発行したパンフレット²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾²⁸⁾²⁹⁾

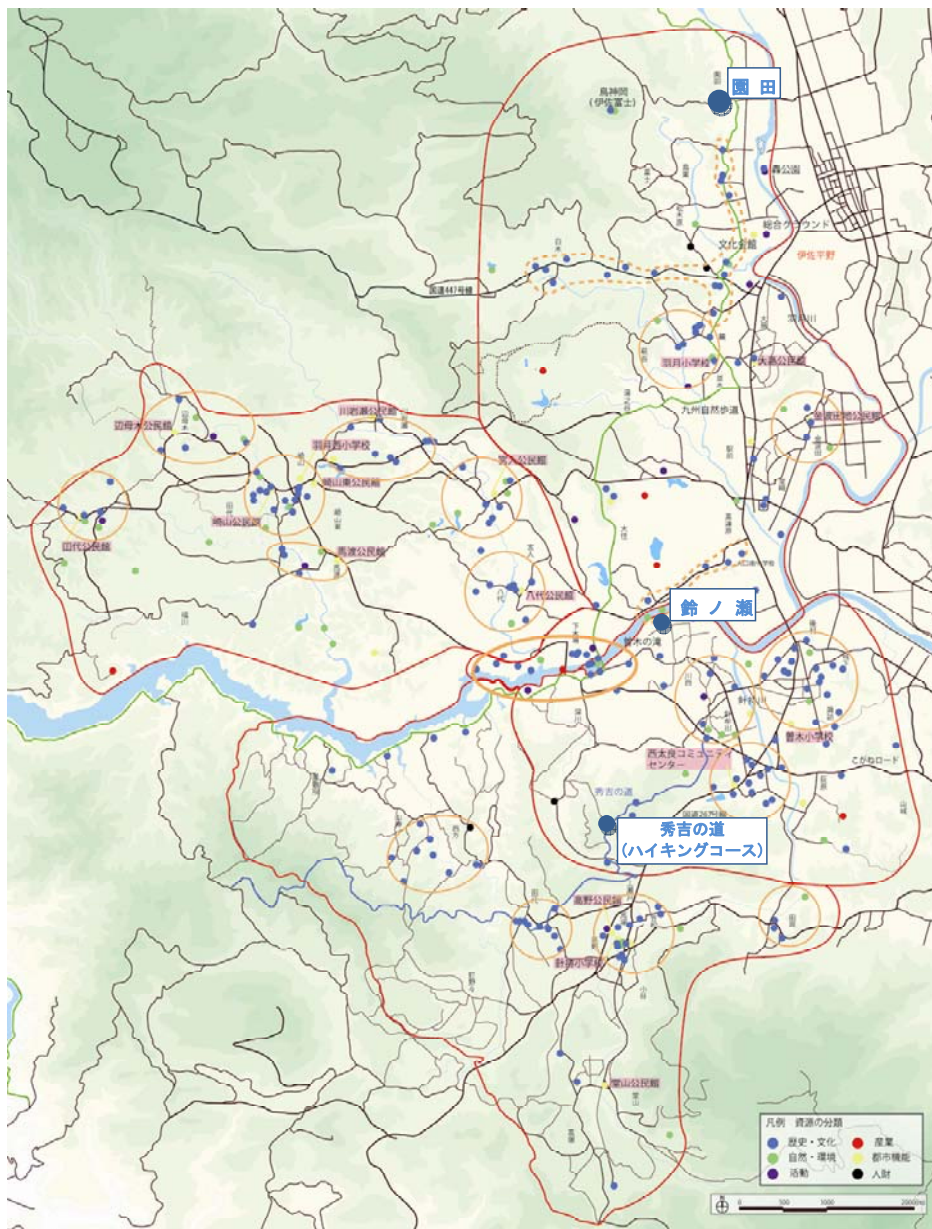


図-2 住民が捉えている資源の分布
(赤枠は小学校区を示す)

及びウェブサイト³⁰⁾³¹⁾³²⁾³³⁾を対象とした。その結果、パンフレット及びウェブサイトとともに発信されていたのは、曾木の滝、曾木発電所遺構、轟公園、白木神社、天堂ヶ尾閼白陣等、以前より伊佐観光の代表とされてきた場所であった。また、発信内容としては曾木の滝公園や、轟公園、総合グラウンドや文化会館等を利用した観光向けのイベントを発信しており、イベントにより観光客を集めようとする戦略が窺える。さらに特産品や食等が地域資源として加わるが、食については曾木の滝公園内に3件、国道沿いに2件あるのみである。こうした状況は、通過型の要因となっていると考えられる。

(2) 地域資源の抽出

これまでに挙げた主体（行政・住民）及び媒体（パンフレット・ウェブサイト）が、各々捉えている資源のうち、重複しているものを中心に表-5に列挙する。これらすべてで資源と捉えられているのは曾木発電所遺構及び水路跡、曾木の滝・曾木の滝

公園、カワゴケソウ、轟公園であり、地域資源6分類のうち「歴史・文化」「自然・環境」「活動」に該当する。さらに、3つ以上の主体・媒体が捉えている資源に目を向けると、白木神社、良眼房の碑・川ざらえの碑、船着場跡・米倉跡、湖底に沈む下ノ木場集落、曾木の滝温泉、文化会館、黒豚、天堂ヶ尾閼白陣、多目的広場、と「産業」や「都市機能」が加わる。このように既存の地域資源に関する情報を整理することで、地域資源の絞り込みが可能となる一方、地域資源分類に注意すると、「人財」が地域資源として位置づけられにくいことが分かる。

「人財」はソフト施策の進展に欠かせない資源であり、早急にこれを補完する必要がある。住民により挙げられた地域の産業を支える名人や、曾木の滝周辺でツーリズム等の体験メニューを実施するNPO法人あたらし会を、資源として明確に位置づけるとともに、こうした「人財」の育成や支援そのものを、行政においてもソフト施策の「計画」と位置づけ、取り組むことが肝要である。

表-5 主体・媒体別地域資源の重複状況

小学校区	資源分類	資源	行政の捉える資源 (既往の取り組み)	住民が捉える資源 (資源絵地図帳)	プロモーション	
					パンフレット類	Web
羽月	人財	竹細工の名人	-	○	-	-
		むしろ作りの名人	-	○	-	-
	歴史・文化	清水神社	-	○	○	-
		白木神社	-	○	○	○
		強兵衛のカッパ石	-	○	○	-
		強兵衛の力石	-	○	○	-
		良眼房の碑・川ざらえの碑	○	○	○	-
		船着場跡・米倉跡	○	○	○	-
		稲荷神社	-	-	○	-
		鈴の瀬渡し	-	-	○	-
		曾木第一発電所跡	○	-	○	-
		曾木発電所遺構	○	-	○	○
		曾木第二発電所橋・水路跡	○	-	○	-
		発電所オーバーフロー排水口跡	○	-	○	-
		水路跡	○	○	○	○
	湖底に沈む下ノ木場集落	○	○	○	-	
	水天様	-	○	○	-	
	学童のくぐり岩	-	○	○	-	
	産業	稚アユ	-	○	○	-
		鳥神岡(伊佐富士)	-	○	○	-
	自然・環境	曾木の滝	○	○	○	-
		小滝	-	○	○	-
		カワゴケソウ	○	○	○	○
	活動	曾木の滝温泉	-	○	○	○
		曾木の滝公園	○	○	○	○
		あたらし村(宮人川ピオトープ)	-	○	○	○
		轟公園	○	○	○	○
いけす料理 あまくさ		-	-	○	-	
かっぱ亭・なりさわ・花笠		-	-	○	-	
半次郎どん		-	-	○	-	
もみじ祭り		○	-	-	○	
スターダストin大口 星空の街コンサート		-	-	-	○	
伊佐市花火大会		-	-	-	○	
「氷の祭典」アイスカービング	-	-	-	○		
都市機能	文化会館	-	○	○	○	
	羽月地区公民館	-	-	-	○	
	伊佐交通タクシー	-	-	-	○	
	県立北薩病院	-	-	○	○	
小水力発電所	○	-	-	-		
羽月西	人財	黒豚つくりの名人	-	○	-	
	産業	黒豚	-	○	○	
	都市機能	羽月西青少年センター	-	-	○	
針持	人財	わら草履づくり名人	-	○	-	
	歴史・文化	下ノ木場吊り橋跡	-	-	○	
		曾木発電所遺構展望所	-	-	○	
	活動	針持温泉閼白陣	-	○	○	
ラーメン由紀		-	-	-	○	
曾木	人財	花つくりの名人	-	○	-	
	歴史・文化	天堂ヶ尾閼白陣	-	○	○	
		瀧之神社	○	○	○	
	都市機能	多目的広場	○	○	○	
西木良コミュニティセンター		-	○	-		
こがねロード	-	○	○	-		
全域	自然・環境	動植物	○	-	-	
		川内川	○	-	-	
		大鶴湖	○	-	-	
	都市機能	国道	○	-	-	
		曾木分水路 (仮)新曾木大橋	○	-	-	

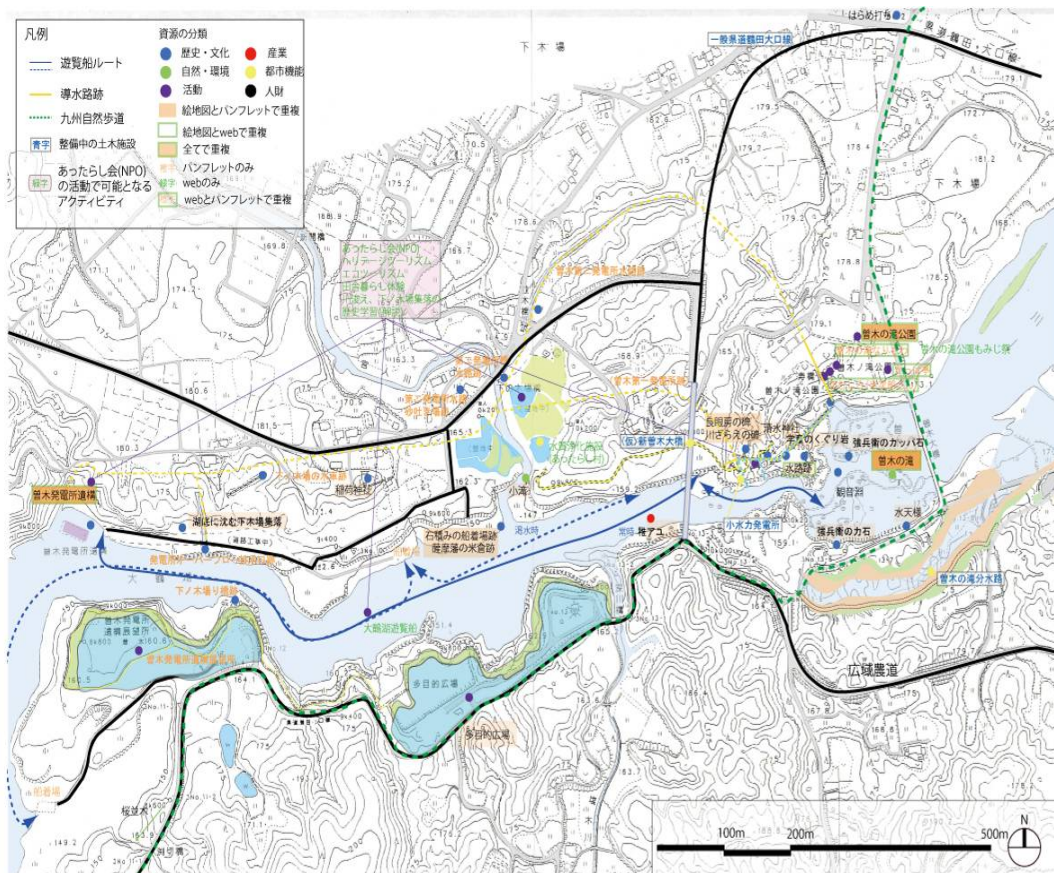


図-3 曾木の滝周辺の着地型観光資源

(3) 曾木の滝周辺の着地型観光資源

ここで、「曾木の滝に依存した通過型観光地を、周辺の他の資源と連携を図ることにより、滞在時間の延伸、さらには交流・体験型の観光地への転換を図る」という本研究の目的に立ち返り、上記で絞り込んだ地域資源を、曾木の滝周辺という空間条件でさらに絞り込む(図-3)。当該範囲は、行政の取り組みの大半が集中し、曾木発電所遺構や船着場跡・米倉跡といった「歴史・文化」、曾木の滝やカワゴケソウなど「自然・環境」、曾木の滝公園やあつたらし村などの「活動」、「都市機能」である多目的広場など、代表的資源が集積している。さらに範囲内には、「産業」に分類される稚アユも存在する。また NPO 法人あつたらし会は主にこの範囲内で活動する貴重な「人財」である。

このように、当該地域には着地型観光に必要な資源は揃っており、今後の課題は、資源の増産ではなく、資源のネットワーク化である。その際「人財」は重要な役割となることが予想される。

6. おわりに

本稿では、着地型観光地形成手法の4つのステップのうち、I. 地域資源探し及びII. 観光商品に磨きあげるに該当する部分を示した。実際には、各資源の歴史的由来や地域との関わりに関する調査も実施したが、紙面の都合上、これを割愛した。今後は、III. 地域で共有できる宝化として、個々の資源が持つ文化性・ストーリー性に着目し、複数の資源を論

理的かつ空間的に繋ぎ、ネットワーク化を試み、IV. 社会実験を通じた呼び込みの叩き台を着地の人々に提示していく予定である。さらに来場客の増えるもみじ祭の時期に合わせ、行政やNPOらの協力を得てツーリズムの試行を行う。試行結果をもとに着地の人々とともに曾木の滝周辺の観光地としての在り方を探ることが当面の目標である。

また本研究では、着地の人々が抱いている「所詮は計画倒れになる」「話し合いばかりで先に進まない」といった心象を払拭する狙いから、本来は着地の人々が行うべきステップI~IIについて、既往の取り組みを客観的に整理することに替えた。これにより、資源の数は充足しているものの、そのネットワーク化や「人財」の育成や支援が喫緊の課題であることが明らかとなった。このように、着地型観光地の形成手法は、観光商品づくり以外の場面において、地域資源の活用検討の手法に応用できる可能性を有する。

多くの地域では既に、アイデア先行、キーパーソンの活躍による地域づくり事例が蓄積されている。行政や住民の公平な役割分担により成立する取り組みを模索することも、取り組みの持続性を考慮した場合は重要な視点であろう。

謝辞：本研究の一部は、文部科学省科学研究費・基盤研究(B)(課題番号22360211)の補助を受けたものです。記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 例えば、伊佐市宿泊振興レンタカー利用助成金 (<http://www.city.isa.kagoshima.jp/news/2011/31.html>) など.
- 2) 大口市：曾木発電所保存活用基本構想，p.1，2000.
- 3) 伊佐市地域振興課によれば、「詳しい統計はとっていないが現在は30万人程度」とされる.
- 4) 尾家建生，金井萬造：これでわかる！着地型観光地域が主役のツーリズム，学芸出版社，pp.7-35，2008
- 5) 十代田朗：観光まちづくりのマーケティング，学芸出版社，pp.78-82，2010.
- 6) 前掲4)，pp.20-21
- 7) 前掲4)，pp.21-22
- 8) 鹿児島県：鹿児島県景観形成基本計画，1998
- 9) 大口市：大口市都市計画マスタープラン，2000
- 10) 大口市：大口市第4次総合振興計画，2000
- 11) 奥薩摩水と緑の郷づくり協議会：奥薩摩・水と緑の郷づくり構想，2002
- 12) 鶴田ダム水源地域ビジョン協議会：鶴田ダム水源地域ビジョン
- 13) 伊佐地区合併協議会：新市まちづくり計画，2008
- 14) 鹿児島県：かごしま将来ビジョン，2008
- 15) 鹿児島県：鹿児島県観光振興基本方針，2010
- 16) 建設省九州地方建設局：川内川水系河川空間管理計画，1990
- 17) 鹿児島県：ふるさとプロムナード計画，1992
- 18) 大口市：曾木の滝周辺整備事業基本計画，1994
- 19) 前掲11)，p.1
- 20) 鹿児島県：21世紀新かごしま総合計画，p.33，2001
- 21) NPO 法人バイオマスワークあつたらし会：NPO 法人「あつたらし会」バイオマスワークの技術情報サイト，<http://attarashikai.com/>
- 22) 大口市商工観光課：曾木の滝周辺整備事業基本計画，p.38，1994
- 23) 大口市：曾木の滝周辺整備事業基本計画，2002
- 24) 大口市：地域資源マップ大口の資源絵地図帳～21世紀への宝物～，pp. 33-89，2001
- 25) 国土交通省九州地方整備局鶴田ダム管理所：鶴田ダムパンフレット
- 26) 産業遺産活用事業実行委員会：曾木の滝周辺資源マップ，2003
- 27) 伊佐地区産業活性化協議会事務局，伊佐市役所地域振興課：伊佐市移住計画応援マガジンこいがい～さ，2010
- 28) 伊佐市地域振興課：かごしまいさ，2008
- 29) 九州南部川と森の県際交流推進会議：やすらぎ三県境湯づくり湯ったり湯めぐりマップ
- 30) 鹿児島県観光交流局観光課－鹿児島県総合観光サイトゆつくり・悠・遊 観光鹿児島：<http://www3.pref.kagoshima.jp/kankou/>
- 31) 伊佐市：伊佐市 HP，<http://www.city.isa.kagoshima.jp/>
- 32) 伊佐市地域ポータルサイト制作部会－鹿児島県伊佐市の地域ポータルサイトいさ NAVI：<http://www.isanavi.com/>
- 33) 伊佐市商工会：伊佐市商工会 HP，<http://isa.kashoren.or.jp/>

(2011.? 受付)

RESEARCH FOR APPLICATION OF CONCEPT OF COMMUNITY TOURISM IN AREAS AROUND SOGI FALLS

Keiko NAGAMURA, Yuji HOSHINO, Ichiro KOBAYASHI
and Yudai NAKAGAWA

Sogi Falls is major sightseeing spots in Isa city, Kagoshima prefecture. In recent year, the diversion channel of Sendai-gawa river had completed, and construction of the new bridge and small hydroelectric generation plant will complete near the falls soon. Furthermore there are various regional resources around the falls, for example, biotope space, the heritage of Sogi power plant, and historic sites of canal of the Edo era etc. However many visitors tour the falls for about one hour, and leave there right away. The challenge is to extend the sojourn time around the falls, and to shift toward interactive sightseeing spots around Sogi Falls. So the purpose of this study is to attempt effective use of regional resources by application of concept of community tourism in areas around Sogi falls. In this paper, at first, we organize the past efforts, which is by government, the list which made by local residents, and promotion about sightseeing spots. Secondly, based on the results, we extract regional resource from some of them, and point out the lack of human resources although they have sufficient other resources.